

バンドの音に埋もれない抜けのよいギター・サウンドを目指して…

# エレキ・ギターのサウンドはアンプからの出音まで

## Marshall

バンドでエレキ・ギターを演奏する時には、ギター・アンプを使って音を増幅させるのが当たり前です。ギター・アンプは単にエレキ・ギターの音を大きくしてドラムなどに負けない音量にするだけでなく、演奏したい曲の雰囲気に合わせて歪ませたり、好みの音を作るサウンド・メイクからも非常に重要な意味を持っています。1962年のスタート以来、世界中で数え切れない数のギタリストのサウンドを支えてきたギター・アンプ界の王者Marshall。そんな伝統のMarshallサウンドを継承しつつ、最新の設計思想とテクノロジーによって生まれた次世代スタンダードのJVMシリーズ。シリーズの中でも使い勝手のよい50Wのスタック・モデル、JVM205Hを紹介します。

### 十分な音量で演奏しよう

部活での練習風景や学内ライブなどで時々見かけるのが、練習用の小型アンプでバンド演奏しているという風景。やはり、バンドで弾く時には大きなアンプを使って十分な音量でプレイするのがオススメです。バンドでの楽器音量バランスを考えると、一番音量の大きいのがドラムです。練習用の小型アンプではどうしてもドラムの音量に掻き消されてしまいますから、観客にギター音が聞こえない...なんてことも多々あります。単純に音量の問題だけなら、アンプにマイクを立てて、PA機器で増幅してもいいですが、それでは他のメンバーにギターアンプからの音が聞こえず、マイクを通すことでサウンドの印象が変わってしまいます。バンドの練習時にはPA機器を使わない状態でバンドとしての音量バランスが取れていることが必要ですから、やはり十分な音量の出せるアンプが必要不可欠です。サウンドの質や迫力感という意味でも、ぜひとも大型アンプを使って欲しいです。JVM205Hは50W出力。部室でのバンド練習からホールなどでのライブまでカバーする、非常に使い勝手の良いモデルと言えます。

### スタック・アンプを使ってみよう

練習用の小型コンポ・アンプの場合は、電源を入れてスイッチをONにすればすぐに音を出すことができます。しかし、JVM205Hのようにアンプとキャビネット（スピーカー）が分離したスタック・アンプの場合、まずアンプ・ヘッドとキャビネットを正しく接続しなくてはなりません。

アンプ・ヘッドの背面を見ると、4 や8 などいくつかの端子が付いていて、どの端子をキャビネットと繋げばいいのかわかってしまうかもしれません。実は、何も難しいことはなく、使用するキャビネットと同じ数字を繋ぐのが基本。例えばキャビネットに16 と書かれている場合は、アンプ側も16 の出力端子から接続します。もし、アンプの8 出力から16 のキャビネットに繋いでしまうと音は出ますが、音やせと言って、本来よりもショボイ音になってしまいます。そして注意したいのが逆の場合。つまりアンプの出力側よりキャビネットの数字が小さいと、アンプが壊れてしまう可能性もあるのです。数字を合わせるだけなので決して難しいものではありませんから、ぜひ覚えておいてください。

### 背面パネルを見てみよう

スピーカー出力端子の話題が出たところで、本体の背面パネルにも注目してみましょう。背面パネルにはスピーカー出力端子の他にも色々な端子が付いています。中でも注目したいのがエフェクト・ループ。エフェクト・ループは、その名の通り、エフェクターを接続する端子です。通常のストンプ・ボックスはアンプのINPUTに入力する前に使うのが一般的ですが、アンプを歪ませつつ、ディレイやリバーブなどの空間系やモジュレーション系エフェクトを使いたい場合に少し問題が生じます。そのままアンプの前にエフェクトを通してしまうと、ディレイやリバーブの音も歪んでしまうのです。それでもカッコいい場合もありますが、クリアなリバーブやディレイ音が欲しい場合は歪みの後...つまりアンプの後にエフェクターを使う必要があります。そこで登場するのがエフェクト・ループ。音を歪ませるプリアンプ回路を通った後の信号を抜き出すことで、先述のようなエフェクト処理を可能にします。また、JVM205Hのフロント・パネルにはエフェクト・ループ機能のON/OFFスイッチがありますが、この端子に何もエフェクターを接続しない状態でミックス・コントロールをウェット側に設定しておくことで、アンプのミュート・スイッチのように使うという裏技テクニックもあります。その他、JVM205Hにはキャビネットで鳴っているようなサウンドをシミュレートし、レコーディングなどに便利なエミュレートッド・ライン・アウトやフット・スイッチ、MIDIイン/スルーなど、欲しい音を作るためのこだわりの機能や端子が搭載されているのです。

### 真空管アンプの電源は2つある？

JVM205Hのつまみやボタンの意味は、右ページの上部に紹介した通りです。少し多いですが、GAINやVOLUME、HIGH/MID/BASSのEQなど、基本は小型アンプと同じ感覚で使うことができます。普段、トランジスタ・アンプを使っている人は電源の入れ方に注意しましょう。JVM205Hは音の増幅に真空管を使ったチューブ・アンプです。POWERとSTAND BYという2つの電源スイッチがあるのです。POWERスイッチはアンプの主電源でONにすると電気が供給されて真空管が暖まり始めます。そして音を出すのが

STANDBYスイッチ。2つのスイッチをONにすることで初めて音が出せるのですが、だからといって2つのスイッチを同時にONにしてはダメなのです。まず最初にPOWERスイッチを入れ、真空管が程良く暖まるまで2~3分待ち、それからSTANDBYスイッチをONにして、音作りを始めます。真空管が暖まる前に音を出してしまうと、真空管にダメージを与えてしまうのです。電源を切る場合は、その逆になります。つまみをゼロに戻してSTANDBYスイッチをOFFにし、しばらく時間を空けてから、POWERスイッチをOFFにします。ちなみに、休憩中やライブの転換中にはSTANDBYスイッチをOFFにするだけでOK。POWERがONでもSTANDBYがOFFならシールドの抜き差しが可能です。

### JVM205Hのココが凄い！

これらを踏まえた上で、改めてJVM205Hを見ていきましょう。たくさんのつまみがありますが、よく見ていくと使い慣れた小型アンプと基本は同じです。

チャンネルはクリーン / クランチとオーバードライブの2チャンネル構成で、各チャンネルごとにGAINやEQ、VOLUME、リバーブを搭載。チャンネルはフット・スイッチでも切り替えられるので、曲中でリバーブの掛かった美しいクリーン・トーンのアルペジオから、歪んだバックギンに切り替えたい...なんて使い方も自由自在です。しかも、マスター・ボリュームが2つあるのでバックギンとソロで音量を変えて演奏する

こともできます。

これだけでも、エフェクターを繋がなくても色々な音ができるのですが、JVM205Hの各チャンネルには、さらに3種類のモードが隠されているのです。つまり、2チャンネル×3モードの合計6種類のサウンドを切り替えが可能です。澄み渡るようなクリーン・トーンから、往年のロックで聞くことのできるMarshallらしいクランチ、はたまたヘヴィメタルに最適な激歪みまで、Marshallアンプの歴史を振り返っているかのようです。1台のアンプから出るサウンドとは思えないほど多くのバリエーションを作り出すことができます。使いやすさ、音の良さ、音色バリエーションのどれをとっても優秀なJVM205Hは、色々なギター・プレイヤーがいる軽音楽部の部屋に置くギター・アンプとして適しているのではないかと思います。



2チャンネル×3モードで合計6つのサウンドを凝縮した、JVM205H。まとまりのあるサウンドで、練習からステージまで幅広く使える50W出力モデル



フット・スイッチを使うことで、チャンネルやモードなど、さまざまな機能を足下でコントロールできます



POWERスイッチ：JVM205Hの主電源です。ONにすることで真空管が暖まり始めます。  
STANDBYスイッチ：実際に音を出すかどうかを決めるスイッチです。  
FOOTSWITCH/MIDI PROGRAM：接続したフット・スイッチの動作モードを、フットスイッチ・プログラム・モードとMIDIプログラム・モードから切り替えます。  
FX LOOP：リア・パネルのエフェクト・ループ機能のON/OFFを設定します。

MASTER 1/2：JVM205Hには、2つのマスター・ボリュームが用意されており、個別の音量を設定、瞬時に切り替えて使うことができます。  
RESONANCE：超低域成分のレスポンスを調整します。  
PRESENCE：超高域成分のレスポンスを調整します。  
REVERB：各チャンネルごとにリバーブの量を設定します。  
VOLUME：各チャンネルごとの音量を調整します。

BASS：低域の質感を調整します。  
MIDDLE：中域の質感を調整します。  
TREBLE：高域の質感を調整します。  
GAIN：歪みの量を調整します。  
CLEAN/CRUNCH：クリーン、クランチ・チャンネルに切り替えるスイッチです。  
OVERDRIVE：オーバードライブ・チャンネルに切り替えるスイッチです。  
INPUT：ギターやエフェクターの出力を接続する入力端子です。

### Marshallを使おう！

現在、様々なメーカーがギター・アンプを作っていますが、中でもアンプの王道であり、スタンダードなのがMarshall（マーシャル）です。バンドをやっているMarshallを知らない人はいないでしょう。そんなMarshallは、元々はボーカリストであり、ドラマーでもあったジム・マーシャル氏によって、イギリスはロンドンで設立されたメーカー。FenderのBassmanを参考にしながら、試行錯誤を重ねて作ったオリジナル



マーシャル・アンプの創設者、ジム・マーシャル氏

アンプ、JTM45にはじまり、エリック・クラプトンが使ったことでBlues Breakerの愛称で呼ばれるコンポ・アンプ1962など、数々の名機を生み出します。その後、1981年にJCM800、1990年にJCM900、そして2000年直前にはJCM2000を発売。世界中のギタリストに愛用され続けてきたMarshallアンプの歴史は、まさにロックの歴史と言っても過言ではありません。今回紹介したJVMシリーズは、これまでのMarshallの名機を彷彿とさせるサウンドが満載の人気アンプです。